大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.30　　1993. 9. 30.

目次

電子化情報がもたらすもの 1
1993年度「指定研究」研究計画紹介 2
1992年度「指定研究」研究経過報告 3
「指定研究」研究会記録
　中国の仏教研究について 9
　現在ドイツ神学者の仏教観 11
学会参加報告 16
開放セミナー 21
彙報 23

電子化情報がもたらすもの

所長　藤田昭彦

情報化時代の到来が喧伝される中で、大学や研究機関は、さまざまな学術研究情報をペーパーメディア（出版物）を通じて発信し、機械可読な形で蓄積しつつある。情報化社会にあって情報処理を支援するコンピュータはまさにメディアとなる。電子の形で保存される「デジタル化情報」は、情報流通とその授受の形態を激変させる。一定の方式で記録された電子化データは、つねにコンピュータで復元でき、ネットワークは世界中のどの地点からでも同一の情報に接近し加工することを可能にする。

図書館にみるように、検索の便宜がはかられている蓄積情報は「データベース」となるが、機械可読データによる情報処理の利便さははかりしれない。これらは、研究の効率を高めるだけでなく、研究の新しい手がかりさえもたらすであろう。電子化された情報は容易にマルチメディア化され、いまは文字印刷媒体が主流であるが、徐々に各種電子メディア、たとえば音楽ソースのCDと同様のディスク、CD-ROM（機械可読記憶媒体）などが用いられつつある。すでに各種辞典、著名な古典基本テクスト、さらには聖書などがCD-ROMの形で、数多く“出版”されているのである。本学図書館には、研究上貴重な資料が多数所蔵され、学内外から頻繁に利用される。それらを電子化して機械可読の形で刊行すれば、貴重書保存のためにも、データ流通のためにも、きわめて有益な事業となるであろう。

情報化社会の進展はいま、わたしたちに「バラ色の未来」を夢見させてくれる。しかしその実現には乗り越えなければならない課題が多くある。なかでも学術研究に関わる情報化社会実現にとって最大の課題は、情報のデジタル化そのものであると思う。

学術研究に供される情報のコンピュータ入力は世界中で精力的に行われているが、その研究領域はきわめて限られたものでしかない。何よりも機械可読な自然言語は限られている。本学に関わりの深いアジア地域の言語は、コンピュータシステムの不備により機械処理が困難な場合が少なくない。そのような言語による情報の機械処理を求めるならば、あえて、機械システム内部におよぶ新規の開発が要請されるのである。真宗総合研究所においてチベット語システムの開発を計画し、現在テストランをひかえて最後の調整に入っているのは、このような事情からである。研究のための道具を手作りするに等しい試みであるが、完成すれば、この分野でのきわめて有用なツールとなると信じている。

基本的な道具立てが整ったとしても、なおデータの入力に関わる隘路が存在する。古典テクストの入力では、異本のすべてを入力しなければならないことも生ずるであろう。入力にあたる者は相当の専門的知識を有し、原典テクストを正確に読み取れる者でなければならない。あるいは光学読み取り装置などを利用した自動的入力を行い、入力されたデータを研究者が慎重に校正して、それを確定してゆかねばならない。いずれにしても、要員の確保はなかなか解決しがたい問題となるであろう。

大学や研究所から自ら情報の発信基地を任ずるのであれば、これからますます進展する情報化社会に十全に機能する体制を早急に用意しなければならないことは言をまたない。いまある情報化の隘路を打破するためにも、私たちは、学生と教育と研究に一層の努力を傾注しなければならない。

1993(平成5)年度「指定研究」研究計画紹介

研究名	研究課題及び研究組織
特定研究 大学史編纂研究 代表者 学長・寺川　俊昭	研究課題　「近代における大谷大学の成立と展開の研究」 研究員　福島　光哉（チーフ・教授） 神戸　和麿（教授） 武田　武麿（教授） 佐々木令信（助教授） 延塚　知道（助教授） 三明　智彰（助教授） 宮崎　健司（専任講師） 藤田　昭彦（所長・教授） 宮下　晴輝（主事・助教授） 研究補助員　稲葉　広由（博士課程修了） 星名　万美（修士課程修了）
特定研究 国際仏教研究 代表者 学長・寺川　俊昭	研究課題　「諸外国における仏教受容の様相の研究」 研究員　多田　稔（チーフ・教授） 安富　信哉（教授） 加来　雄之（専任講師） 桂華　淳祥（専任講師） ロバート・F・ローズ（専任講師） 藤田　昭彦（所長・教授） 宮下　晴輝（主事・助教授） 嘱託研究員　ジョン・ロス・カーター（客員研究員・コルゲート大学教授） 樋口　章信（本学非常勤講師） 研究補助員　加藤　均（博士課程修了） 竹橋　太（博士課程修了）
委託研究 真宗史料研究 代表者 学長・寺川　俊昭	研究課題　「東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版」 研究員　大桑　斉（チーフ・教授） 木場　明志（助教授） 草野　顕之（助教授） 嘱託研究員　上場　顕雄（本学非常勤講師） 福島　和人（本学非常勤講師） 西田　真因（真宗教学研究所研究員） 谷端　昭夫（裏千家学園講師） 研究補助員　熊野　恒陽（博士課程） 福島　栄寿（博士課程） 上杉　義麿（博士課程） 服部　了潤（博士課程）
委託研究 西蔵文献研究 代表者 学長・寺川　俊昭	研究課題　「大谷大学所蔵の北京版大蔵経及び蔵外文献の文献研究」 研究員　小川　一乗（チーフ・教授） 片野　道雄（教授） 小谷信千代（助教授） 白館　戒雲（助教授） 兵藤　一夫（専任講師） 嘱託研究員　今枝　由郎（客員研究員・フランス国立科学研究庁教授） 研究補助員　高田　順仁（博士課程修了） 福田　琢（博士課程修了） 菊地　哲（博士課程）
委託研究 大蔵経学術用語研究 代表者 学長・寺川　俊昭	研究課題　「『大正新脩大蔵経』宝積部関係典籍における学術用語の研究」 研究員　鍵主　良敬（チーフ・教授） 古田　和弘（教授） 木村　宣彰（助教授） 一色　順心（助教授） 織田　顕祐（専任講師） 山野　俊郎（専任講師） 研究補助員　長沢　円（博士課程修了）

1992(平成4)年度「指定研究」研究経過報告

特定研究

大学史編纂研究
—近代における大谷大学の成立と展開の研究—

研究員・チーフ　福島　光哉
(仏教学)

本年度は原則的には、「昨年度の研究の継続」ということで出発した。従って、①年表作成のチームと②大学の組織や教学史を研究するチーム、それぞれが昨年度に引き続き研究を継続することになった。

◎研究会

4月17日(金)　午後4時半　於 真宗総合研究所22研究室
講題　「真宗大学の特質」
助教授 延塚知道（研究員）

研究発表の概要は以下の通りである。(詳しくは『親鸞教学』60号所収「真宗大学の特質」を参照して頂ければ幸いである。)

1901(明治34)年の真宗大学開校の辞で、よく知られているように清沢満之は、「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。」と言われる。真宗大学が学問の府として建とうとする限りその本質的な「異なり」は、当然学問の質にある。満之は、それを世間の学と出世間の学として峻別する。その事は、一つには従来から言われるように、世間の学へ退落していた当時の宗学との決別を意味する。しかしもう一つは、明治の高官や諸学校の校長を前に言うのであるから、当時の国体の中で大学として建つ諸学校との具体的な「異なり」を言うのである。

ここでは、基督教主義の宗教学校として人間教育に力を注いだ同志社大学の当時の動向を追って、真宗大学の特質を浮き彫りにしようと試みた。同志社は、内村鑑三の不敬事件によって、当時の教育勅語体制の強力な統制を受け、瀕死の状態にまで追い込まれた。窮余の策として徴兵猶予を政府に申請するが、そのために大学の綱領を削り、基督教主義を後退させる。満之はこの事件に注目し『教界時言』で「吾が教界の教育家に警告す」という題で発言している。そこには、全体に深い悲嘆を湛えながら、当時の同志社校長と文部大臣とに痛烈な批判をし、満之自身の立つべき信念と、仏教界さらには真宗大学のとるべき方向を示しているのである。

◎連絡会

6月2日(火)　正午　於 真宗総合研究所38研究室
研究所移転に伴い、諸資料の整理方法を検討した。

7月8日(水)　午後6時半　於 真宗総合研究所11研究室
新研究室の諸資料の配置など、研究体制を整えた。

10月26日(月)　正午　於 第二小会議室
新たに、佐々木令信助教授を当プロジェクトの研究員として加えることになった。それによって、研究チームの再編成について協議した。

2月5日(金)　午後3時　於 第一研究室分室1
春休み中の研究員各個の研究課題を確認し合った。

特定研究

国際仏教研究
—諸外国における仏教受容の様相の研究—

研究員・チーフ　多田　稔
(国際文化学)

「国際仏教研究」班は二年目を迎えた。研究所の移転、研究所図書の国際研への移管など多くの事務処理を抱えたあわただしい年度であったが、地道に活動を開始した一年間であった。

本研究班は初年度に以下の研究の基本的方針を策定している。

初年度研究計画基本方針
(1)文化的対話のための調査研究
(2)国際的な研究テーマの紹介
(3)仏教研究の海外への紹介
(4)資料の収集・整理・公開

上記の初年度の研究方針に基づき、「諸外国における仏教受容の様相の研究」という研究班の主テーマを実現

するための今年度の研究テーマを「仏教を通じての東西の文化的対話」におくことが確認された。

また初年度の研究成果も踏まえ、「仏教を通じての東西の文化的対話」の実現のためには、従来より行われていた文献による海外における仏教研究の把握、また海外への人材派遣などの人的交流だけでは十分な成果を求め難いという指摘がなされ、改善策が練られた。

そして、海外における仏教研究の状況の調査、他大学における研究活動などを検討した結果、実りある「対話」を実現するためには、大谷大学がもつ独自の人的、歴史的資産を海外に紹介していくことが急務の課題であるという認識に達した。そのために各研究員がそれぞれ「対話」をどうとらえているか、ということを互いに理解し合うために、先づそれぞれが自分の所見を発表することになり、順次発表が行なわれた。

研究会は、「文化的交流」の基盤をつくるために、大谷大学が海外との対話に向けて、どのようなことを提供するべきであり、提供することができるのか、またどのような方法によってなされるべきかということが検討されることになった。

このような認識のもと「仏教を通じての東西の文化的対話」を実現するためには、大谷大学の独自性をもった素材を学会に提供していくことが不可欠であり、大谷大学による英文の出版物を刊行することが望ましいという結論に達した。

単なる理念的な案に止らず具体的実践的な研究をということから、研究班において実際に英文ジャーナルを試作してはどうかということになった。その中には、定期に発刊していくための編集・翻訳などの体制、頒布の方法、コンピューターの利用方法などについての具体的な研究も含まれる。

研究班では、具体的検討を重ね、発信の理念と方法などを整理し、発信の目的については次の2点に絞った。

大谷大学の視点

1．親鸞の思想を中心に紹介する

2．近代における真宗研究の展開の紹介

特に清沢満之・曽我量深・金子大栄・安田理深を中心として

上記の研究成果以外にも、初年度の計画にもとづき以下の研究も継続的に行われた。

(1)研究員による少くとも毎月1回以上の研究会

(2)海外における学会への研究員の派遣

(3)海外で活躍する研究者を紹いての研究会の開催

(4)「海外仏教研究」班の継続作業としての資料収集とコンピューターによるデータベース化

(5)その他

以下、順次、上記の研究成果を報告する。

【研究員による研究会】

4月15日(水)午後2時30分　研究所21番研究室

議題　1991年度報告について

1992年度の研究計画について(1)

5月6日(水)午後0時10分　研究所会議室

議題　1992年度の研究計画について(2)

6月3日(水)午後0時10分　研究所21番研究室

議題　研究所移転について

1992年度の研究計画について(3)

報告「"4th International Buddhist-Christian Dialog Conference" 参加報告」

報告者　専任講師　ロバート・F・ローズ(研究員)

報告「南山宗教文化シンポジウム：宗教と文化を考える―諸宗教対話の反省と展望―に参加して」

報告者　教授　武田　武麿(研究員)

11月4日(水)午後0時10分　博綜館第1小会議室

議題　1992年度の研究成果について(1)

12月2日(水)午後0時10分　博綜館第1小会議室

議題　1992年度研究成果について(2)

12月14日(月)午後0時10分　博綜館第1小会議室

報告「ウィスコンシン大学訪問報告」

報告者　教授　武田　武麿(研究員)

1月13日(水)午後1時10分　博綜館第1小会議室

議題　「ジャーナル発刊について(1)」

3月3日(水)午後0時10分　第一研究室分室1

議題　「ジャーナル発刊について(2)」

【海外における学会への研究員の派遣】

Fourth International Buddhist-Christian Dialog Conference

7月30日から8月3日まで、アメリカのボストンで、第4回国際仏教徒キリスト教徒対話学会が開催され、ロバート・F・ローズ研究員が参加した。

1992 AAR/SBL Annual Meeting

11月21日から24日まで、アメリカのサンフランシスコで、1992年度アメリカ宗教学会年次大会が開催され、武田武麿研究所所長とロバート・F・ローズ研究員が参加した。

【海外で活躍する研究者を紹いての研究会の開催】

4月23日(木)午後4時10分　研究所会議室

テーマ「ドイツにおける仏教研究事情」

講師　マールブルク大学

クリストフ・クライネ氏

7月15日(水)午後0時30分　博綜館第3会議室

テーマ「アメリカにおけるわたしの仏教研究」
講師　デポー大学
ポール・ワット博士
7月23日(木)午後4時10分　博綜館第3会議室
テーマ「信心為本と悪人正機――外国人の理解と疑問」
講師　中国社会科学院世界宗教研究所
仏教研究室主任
楊　曽文氏
10月23日(金)午後4時10分　博綜館第4会議室
テーマ「西チベットの仏教王国グゲ」
講師　フランス国立科学研究庁教授
今枝　由郎氏
11月16日(月)午後0時15分　真宗総合研究所会議室
テーマ「私の研究〈日本の宗教〉について」
講師　特別研究員
エスベン・アンドレアッセン氏
12月19日(土)午後0時　博綜館第4会議室
テーマ「現在ドイツ哲学者の仏教観」
講師　ミュンヘン大学東方学研究所教授
ヨハネス・ラウベ博士
12月25日(金)午後5時　真宗総合研究所
研究懇談会―アンドレアッセン氏、ムボンド氏を囲んで―
3月22日(月)午後5時　真宗総合研究所会議室
研究懇談会―アンドレアッセン氏を囲んで―

【研究機関への調査訪問】
すでに英文ジャーナルを出版している研究機関、またコンピューターによるデータ構築を先駆的に行っている研究機関を調査訪問した。
「南山大学宗教文化研究所」
「法宝義林」
「NCC宗教研究所」
「花園・禅文化研究所」

【その他】
「第8回南山宗教文化研究所シンポジウム」参加
9月1日から2日まで名古屋市の南山宗教文化研究所で開催された「第8回南山宗教文化研究所シンポジウム：宗教と文化を考える―諸宗教対話の反省と展望―」に武田武麿研究所所長が参加した。
「中華仏学研究所日本友好訪問団」を迎える
台湾よりの張聖厳氏を団長とする「中華仏学研究所日本友好訪問団」一行10名が夏期休暇中大谷大学を訪問、多田稔チーフ・桂華淳祥研究員が中心となって迎えた。

委託研究

真宗史料研究
―東本願寺近世近代史料の研究と翻刻並びに出版―

研究員・チーフ　大桑　斉
(国史学)

本研究は、「園林文庫」の整理・目録作成作業、および主要史料の翻刻・出版、に主力をおいて行ってきている。以下、その主力を注いでいる部分についてにとどめて、1992年度作業経過について報告する。

―「園林文庫」カード整理の現状について

園林文庫の整理、研究は、現在その基礎作業として、1953(昭和28)年に作成された『園林文庫調査目録』に基づき、あらためて一点一点の史料の内容を確認するとともに、さらに詳細を期すべく可能なかぎりの史料の細別化をはかっており、細別化された史料にあらたに名称を付し、史料一点につきカード一枚を原則として、その内容分類、形態、作成時期などを項目とした史料のカード化を具体的内容とする作業を進めている。近世末期から明治初期にかけての宗主であった達如、厳如両上人の手元の書類、記録を中心としてなる園林文庫は、その性格上、宗門内の様々な種類の記録を含むのはもちろんのこと、宗門外の公家や政府要人との交際や連絡を示す書簡、文書、さらには両上人身辺の記録をも多数残すというものであり、記録作成の当事者においてしか理解できない事柄も多く、また多岐にわたるその内容のため、一口にカード化といっても煩雑な手続きを要するものがあって、単に機械的な作業のみで事足りるものでは当然なく、おのずと作業が停滞気味になることもしばしばであった。それでも92年度においては、93年2月末日の段階で、園林文庫が収められているダンボール箱182箱のうち20箱の史料の整理が完了し、総計4787枚のカードの作成をみることができた。ダンボール箱の数で単純に計算して全体の11％弱のカード化の作業が進んだことになる。既に、91年度において21箱分の史料の整理が行われ、小計3567枚のカードの作成がなされており、これで両年度合わせて41箱分、合計8354枚のカード化の作業が完了したことになる。単純計算で、これは全体の予想作業量の四

分の一程度の分量にあたろう。この分であれば全作業の完了もさして遠からぬことのようにも思われるが、作業担当者の習熟度も増したことから、現実に作業量をより増加させていくことが当面の実際的課題となろう。

二　入力について

「園林文庫整理カード」のコンピューター入力作業の現状について、報告する。

1．過去の入力実数について。

1993年３月現在において、入力済の「箱」は二箱（第45箱と第66箱）である。ちなみに、それぞれのデータの件数は、第45箱が1595件、第66箱が103件である。また、昨年度から入力継続中の第15箱は、現在303件を入力済である。

2．入力作業の現状について

入力作業は、必ずしも順調に進んでいるとはいえないのが現状である。その原因はいろいろあるが、主に人員不足にあるとみてよいのではないかと思われる。ちなみに、現在実際に入力作業に携わっている者は２名である。急ぎ増員をはかることが必要と思う。その増員に関してさらに言うならば、一人の作業員が「カード取り」の作業と入力作業の二つをコンスタントに行なうことは、現実的にはかなり困難なことであるように思われるのであり、したがって、入力作業専門スタッフのような形での増員が望ましいのではないかと考える。

3．その他

作成中であった入力作業用のマニュアルが、試作ながら出来上がった。今後改訂を行ないつつ、より入力作業に有効なものになればよいと考えている。

三　『東本願寺家臣名簿』作成について

本作業の目的は、1938(昭和13)年宗学院編修部編による『東本願寺家臣名簿』（以下昭和十三年版『名簿』と略記）を訂正及び補完し、完全な形での家臣名簿・系譜を作成することである。

作業はまず、稲波家文書所収の『家臣系譜』の翻刻原稿をもとに系図を作成することから始めた。その際系図には諱・通称・官途名・出自を記入した。次にこの系図を本願寺記録所文書所収の『三代相恩之調書』、京都府総合資料館所蔵の旧府庁文書所収『東本願寺三代以上家士明細書』（以上二点は明治五年に東本願寺家臣団が解散するに当って作成されたものと思われ、後者が正文、前者は控と推定される）、さらに『家臣系譜』附属の系図を用いて補正した。

以上の過程を経てでき上った系図を昭和十三年版『名簿』と対校し、史料中に見られるが名簿に記載のない家あるいは人物、逆に名簿に記載されているものの史料のない家・人物、更に史料と名簿の間に著しい齟齬や錯簡のみられる系図について摘出した。

以上が本作業の93年３月初旬時点における進展状況である。以後は、より広範な史料の収集を行うと共に、最終段階で摘出した家・人物について若干の考察を加えていく。また系図がほぼ完成している家については順次原稿化してゆく方針であるが、その際の形式、記載事項等については検討中である。

作業進行上の最大の問題点は、昭和十三年版『名簿』作成時に使用された史料の全容が不明確であり、同書の原稿も散逸しているため、典拠となる史料の収集が極めて困難だということである。今後は大学図書館蔵の未整理史料等を中心に収集を進めてゆくことになるであろう。

委託研究

西蔵文献研究
—大谷大学所蔵の北京版大蔵経及び蔵外文献の文献研究—

研究員・チーフ　小川　一乗
（仏教学）

西蔵文献研究班は、大谷大学図書館が所蔵する4000点を超えるチベット蔵外文献を整理・研究することを目的に組織され、発足以来『北京版西蔵大蔵経』の各テキストについて、現存するそのサンクスリット語原典やその漢訳及びそれに対応するパーリ語文献、さらにはデルゲ版、ナルタン版との対応を示す勘同目録の作成、ならびに蔵外文献中に含まれる稀覯書の研究、出版を果たしてきた。

大谷大学図書館所蔵の蔵外文献に関しては、以下の目録がある。

『大谷大学図書館所蔵西蔵文献目録』
大谷大学図書館 1973(Otani Nos. 10001-14104).
同『索引』大谷大学真宗総合研究所 1985.

1992年度は、勘同目録の編集作業が続けて行われたが、諸事情によりその結果を公にすることができなかった。

大谷大学図書館所蔵の『北京版西蔵大蔵経』は、清朝第四世康熙帝在位（1661-1722）中の覆刻1717-20年版の甘殊爾（bKa' 'gyur）45巻（Nos. 1-1055）と、雍正帝在位（1722-35）中の1724年に開版された丹殊爾（bStan 'gyur）105巻（Nos. 2001-5962）と、その目録部（dKar chag）1巻の全151巻から成る。現在まで刊行された勘同目録は、以下のとおりである。

『大谷大学図書館蔵西蔵大蔵経甘殊爾勘同目録』
大谷大学図書館　1930-32(Nos. 1-1055)
『同丹殊爾勘同目録』大谷大学図書館
Ⅰ. 1 (1965, Nos. 2001-2451)
Ⅰ. 2 (1976, Nos. 2452-2921)
Ⅰ. 3 (1977, Nos. 2922-3447)
Ⅰ. 4 (1979, Nos. 3448-4126)
Ⅰ. 5 (1981, Nos. 4127-4661)
Ⅰ. 6 (1983, Nos. 4662-5183)
Ⅱ. 1 (1985, Nos. 5184-5480)

『丹殊爾勘同目録』既刊分には、讃頌部（bStod tshogs, Nos. 2001-2063）、秘密疏部（rGyud 'grel, Nos. 2064-5183）、般若部（Sher phyin, Nos. 5184-5480）が含まれている。現在は諸経疏部（mDo tshogs 'grel pa）以降、47巻分（Vols. 104-150, Nos. 5481-5962）を準備中である。1993年度には、その続巻を刊行できる予定である。準備中のものは以下のとおりである。

諸経疏部 (mDo tshogs 'grel pa) Nos. 5481-5520.
唯識部 (Sems tsam) Nos. 5521-5586.
阿毘達磨部 (mNgon pa' i bstan bcos) Nos. 5587-5604.
律疏部 ('Dul ba' i 'grel pa) Nos. 5605-5649.
本生部 (sKyes rabs) Nos. 5650-5657.
書翰部 (sPring yig) Nos. 5658-5699.
因明部 (Tshad ma) Nos. 5700-5766.
声明部 (sGra rigs pa) Nos. 5767-5794.
医方明部 (gSo ba rig pa) Nos. 5795-5831.
雑部 (Ngo tshar bstan bcos) Nos. 5832-5962.

なお、本研究班研究員の白館戒雲助教授が、1992年度の研究活動の一貫として、ノルウェーのファーゲルネスで開催された「国際チベット学会」に参加し、研究発表を行った。その際、いくつかの新しい知見を得ることができた。それについては、本研究所「研究所報」No. 29（1993. 3）記載の「学会参加報告」を参照されたい。

1993年度の研究活動としては、『丹殊爾勘同目録』の続巻を刊行することが第一目的となるが、今年度は、コンピューター機器を導入し、前掲の『西蔵文献目録』(大谷大学図書館 1973）のデータベース化を行う予定である。

委託研究

『大正新脩大蔵経』宝積部関係典籍における学術用語の研究

研究員・チーフ　鍵主　良敬
（仏教学）

『大正新脩大蔵経』全100巻は、今日漢訳の経律論を収録する大蔵経としては最も整備されたものである。従って全世界のあらゆる仏教研究者にとって不可欠のものということができる。一口に仏教研究といっても様々な関心の持ち方の違いや目的の異なりがあり、更に東洋文化研究というような視点からも有力な一次資料として『大正新脩大蔵経』は利用される。厖大な量と無尽の内容を持つ『大正新脩大蔵経』を様々な角度から利用するためには、適切な手引きが必要である。そのような便宜となることを願って企画されたのが『大正新脩大蔵経索引』である。

『大正新脩大蔵経索引』は、昭和三十年代の中頃からおよそ三十年あまりの年月を費やして平成二年に全四十五冊が一応完成した。しかしながら、三十余年の積み重ねを経て振り返ってみると、早い時期に公刊されたものには多少改定を加えるべきであると思われる点がないわけでもない。このような事情のもとに『大正新脩大蔵経索引第六巻宝積部』の内容を再検討し、改訂版を出版するのが本研究の直接の目的である。

『大正新脩大蔵経索引第六巻宝積部』（以下『宝積部索引』と略称する）は、本学が昭和四十一年に責任編集したものである。それは『大正新脩大蔵経』第十一巻宝積部上に収められるNo. 310大宝積経から同第十二巻宝積部下に収められるNo. 373後出阿弥陀仏偈までの六十四部の典籍に関する学術用語の整理の結果である。これらの中には独立した大乗経典の集大成とも言うべき『大寶積経』（120巻）や訳出後当時の中国仏教者たちに大きな衝撃を与えた『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』（1巻、以下『勝鬘経』と略称する）ならびに浄土教の所依の経典である『仏説無量寿経』を中心とする浄土教経典などが含まれている。これらの諸典籍に関して本研究の目的を達成するためには、およそ次のような二つの手順が必要となるであろう。まず、これらの諸経典に説かれる様々な学術用語がどのように『宝積部索引』に整理されてい

るかを把握しなければならない。そのためには当該の典籍についての精査が不可決である。次に索引の現状を把握した上で、それをどのように改訂していくかが検討されなければならない。本研究は三年の研究期間を予定しているので、初年度にあたる本年度は主に前者の視点に立っての研究が進められた。以下にその要点を概説する。

まず研究を開始するに当って研究員全員で本研究の目的を確認した。そこで確認されたことは既に述べた通りである。次にその目的を達成するための方法が検討された。そのおおよそについても既に触れたが、各研究員が研究課題を分担しながら、その分担課題に取りくむ姿勢をできる限り均質にするために共通のテキストによる共同の研究会を定期的に実施してはどうであろうかということが提案された。そこでいくつか検討を重ねた結果、求那跋陀羅訳の『勝鬘経』を共通のテキストとして月二回程度研究会を持つことが決定された。更に具体的に『勝鬘経』を全員で研究してみようとした時、何に注意し、どのような方法で研究すべきかという点の検討を重ねた。その結果として、①テキストとしての『大正新脩大蔵経』自身の校訂、②『宝積部索引』を改訂する場合の目安となるような語彙の選定、③経典の内容の把握を徹底するための現代語訳、の三つを主な内容として正しい訓読をめざすということを当面の課題とすることにした。なおテキストの校訂については『大正新脩大蔵経』を底本とし、法隆寺版・寛文年間版本、宝永年間版本などによって校勘することにした。本年度は前期の途中で研究所の学外移転などがあり、以上のような準備を整えるのに多少の時間を必要とした。以上のような過程を経て十月から各研究分担者の分担課題と共同の研究会が開始された。共同の研究会において課題とした三つの項目は、それぞれが特定のテキストを通して一つの文献を読む際には見逃すことのできないものであり、実際の研究作業は当初予想していたほどにははかどらなかったが、いくつかの当面する問題点と新たな展望を確認することはできた。そのうち当面する問題点についてはやや傍論に亙ると思われるのでここでは省略したい。そこで最後に共同の研究を通してみえてきた新たな展望ということについて少しだけ触れておきたい。

当初、共同の研究会において目的としたことは、既に述べたように『宝積部索引』を改訂するための各研究員の方針を均質化することにあった。その中で具体的な課題を設定したわけであったが、そこで検討したいくつかの点は、現在の研究作業が完了した時点で、それぞれが索引改訂のためということを離れて独立した価値を有するに違いない。具体的には、①の作業が完了すれば、漢訳の『勝鬘経』に関する現在考え得る最終的なテキストを研究者に提供できることになる。②と③の作業が完了すれば、研究者に限らず広く初学者や一般の人々に向って『勝鬘経』を開放することができる。現在では、一応『勝鬘経』の口語訳とされるものはいくつか存在している。それらはいずれもチベット語訳からの口語化であり、チベット語訳よりもはるかに古い時代に成立している漢訳によるものは例を見ない。我々の作業は、こうした現状に対して少なからず裨益するところがあるはずである。

本年度は予定された研究年限の初年にあたるため、以上はあくまで中間報告である。当面の課題は現在の作業を完了させることであり、その成果を『宝積部索引』の改訂作業にフィードバックすることがその次の課題である。

日時 1992年2月26日
場所 研究所会議室

中国の仏教研究について

中国社会科学院世界宗教研究所
仏教研究室主任　楊　曾文

※1991年10月から92年9月までの予定で、京都大学文学部の招聘教授として来日中の楊曾文先生をお迎えし、中国における最近の仏教研究の状況についてお話をうかがった。先生には以前（1985年10月）来日の折りにも当研究所にお越し戴き、当時の仏教研究の事情をお話戴いたことがある（『研究所報』No. 14　参照)。今回はそれ以後の活動状況を中心とした紹介をお願いした。その概要は以下の通りである。(研究員　桂華淳祥記)

1．中国の仏教研究機構

(1)中国社会科学院世界宗教研究所

この研究所には、仏教研究室、キリスト教研究室、イスラム教研究室、道教研究室、宗教原理研究室などがある。そのうち仏教研究室には中国仏教、南伝仏教、日本仏教、朝鮮仏教の研究者及び『中華大蔵経』の編纂にあたっている学者あわせて十五人が所属している。活動状況は次の通り。

中国仏教については、『中国仏教史』を編纂しており、1～3巻はすでに出版し、現在第4巻の出版準備をしている。また禅宗の研究では、私の『六祖壇経敦煌新本』と『唐代神会和尚の禅話録』、魏道儒の『宋代禅宗史論』の出版準備をしており、わずかながら成果を見ているが、今後さらに強化したい研究分野である。中国仏教芸術に関しては、丁明夷が『四川石窟の研究』の著述を進めている。これに先立って彼は雲崗や龍門などの仏教石窟を研究し、論文・解説を多数著わしている。チベット仏教については、李冀誠がその歴史・教義についての解説をしている。南伝仏教については、韓廷杰が『大史』(パーリ語) を中国語に翻訳している。日本仏教史については、私が現在『日本仏教史』を執筆している他、日本の現代の仏教を研究テーマにしているものが三人いる。『中華大蔵経』は、計画では正編百冊、続編百三十冊を編纂することになっている。そのうち昨年までに七十冊の編校を済ませており、すでに四十五冊を出版した。

(2)各省・市における仏教研究機構

各省及び主な市にはそれぞれに社会科学院があり、そこに宗教研究所を置くところがある。私が知るかぎりでは、四川省・雲南省・甘粛省・新疆ウイグル自治区・チベット自治区・青海省・寧夏回族自治区そして上海の社会科学院に宗教研究所が設置されている。そのうち、四川省社会科学院宗教研究所は道教研究に、甘粛省・新疆ウイグル自治区・寧夏回族自治区の宗教研究所はイスラム教研究に、雲南省の宗教研究所は雲南地域の少数民族の宗教研究に、チベット自治区の宗教研究所は蔵伝仏教（ラマ教)研究にそれぞれ重点を置き活動を進めている。また上海の社会科学院宗教研究所では、仏教・道教・キリスト教はもとより中国の現代の宗教についても研究がなされている。この他には陝西省社会科学院の歴史研究所において仏教・道教の研究がなされ、特に長安の仏教研究に重点が置かれている。さらに山西省社会科学院には五台山研究会があり、仏教を中心にした研究が行われていて、『五台山研究』という雑誌を出版している。

(3)中国仏教協会

中国仏教協会は、中国における仏教者の社会団体であり、そのもとに中国仏教文化研究所がある。ここでは中国の仏教文化に関する色々な方面の研究がなされており、『法音』という雑誌で研究成果の一部が発表されると共に、毎年論文集も出版されている。

(4)大学における研究組織

中国には仏教を研究の中心とする大学或いは学部はないが、哲学学部と歴史学部に仏教研究者がいる。たとえば北京大学・中国人民大学・上海復旦大学・南京大学などに仏教研究者がおり、仏教関係の講義が設けられている。また北京大学のなかには禅学研究会がある。

2．中国における最近の仏教研究著作

(1)『中国仏教史』第3巻　任継愈主編、杜継文、丁明夷、楊曾文共同執筆（中国社会科学出版社　1988年）

本書は南北朝の仏教史について詳しく述べており、三教の交渉、疑経、重要な仏典の思想、仏教石窟芸術などを紹介している。なお第4巻（隋唐仏教之一）は出版準備中である。

(2)『五十年来漢唐仏教寺院経済研究』　何茲全編（北京師範大学出版社　1986年）

中国における漢から唐にいたる仏教寺院経済の研究は、今世紀30年代から現在まで約半世紀にわたって行われてきたが、本書はその研究の一つの成果といえよう。また巻末には香港・台湾・日本・東南アジアの研究者の関係論著目録が付されていて便利である。

(3)『理学・仏学・玄学』　湯用彤著（北京大学出版社　1991年）

本書は、湯用彤先生の清華学堂でのテキストと1930年代に発表された論文の一部である。

(4)『西蔵仏教発展史略』　王森著（中国社会科学出版社　1987年）

王森先生は中央民族学院の教授であったが、1990年に亡くなられた。本書はもともと60年代に著されたものであるが、学界ですぐれた学術著作であると認められ、再び出版された。蔵伝仏教の源流・歴史及び仏教と政治との関係を中心に述べられている。

(5)『甘青蔵伝仏教寺院』　蒲文成主編（青海人民出版社　1990年）

1987年、蒲文成先生は西北民族学院歴史学部民族研究所の研究者と協力して、青海・甘粛両省の蔵伝仏教の寺院を調査した。本書はこの調査の結果をまとめたものであり、これによって甘青両省の寺院二百余ヵ所の名称・位置・沿革・宗派・規模・組織・経済・僧侶の数・文物・現状・活仏の伝承・修学制度・宗教活動などを知ることができる。

(6)『周叔迦仏学論著集』上・下巻　周叔迦著（中華書局　1991年）

本書は、中国仏教協会の副会長で著名な仏教学者である周叔迦先生の著作集である。上巻には「中国仏学史」をはじめ仏教各宗派に関する論文が収められており、また下巻には大蔵経の刊印の経過や版本についての論文が収められている。本書の出版は中国の仏教研究におおいに役立つものと思われる。

(7)『中国近代仏教思想史稿』　郭朋、寥自力、張新鷹著（巴蜀書社　1989年）

本書は、郭朋先生の『隋唐仏教』『宋元仏教』『明清仏教』及び『壇経校釈』に続く新著であり、中国近代の著名な思想家の生涯・著作・仏教思想を考察し紹介している。

なお郭朋先生には『漢魏両晋南北朝仏教』（斉魯書社　1986年）という著書もある。

(8)『大唐西域記校注』　季羨林等校注（中華書局　1985年）

本書は、日本の京都大学で校印された『高麗蔵本』を底本とし、『趙城蔵本』など十四種の版本を参考にして校勘したものである。また校勘にあたっては内外の『大唐西域記』に関する研究書も参考にされ従来の研究成果も踏まえているので、現在最も有益な校本であると思う。

また季羨林先生には『季羨林学術論著自選集』（北京師範大学出版社　1991年）がある。

日時 1993年12月19日
場所 博綜館第4会議室

現在ドイツ神学者の仏教観

ミュンヘン大学東方学研究所教授　ヨハネス・ラウベ

1

本日は御招待をいただきましたこと、光栄に存じております。ただ私の日本語は書物で学んだものですので、かたい、エレガントではない日本語です。お聞き苦しい点はどうかお許しください。

看板などに掲げていただいたテーマでは「ドイツにおける哲学者の仏教観」についての話になるというお知らせでしたが、「ドイツにおける神学者の仏教観」と変わりました。けれども、日本の“哲学”の概念から言えば、たとえば西田幾太郎の哲学などを見ますと、これはそう大きな違いにならないと思います。つまり、哲学と宗教の共通したところから西田幾太郎の哲学は出てきている、そういうふうに私は思います。ですから、日本での“哲学”の概念は、ヨーロッパの“哲学”の概念と違って、より広い意味をもっています。逆に言えば、これからドイツの神学者の考えを紹介します中で、その二、三人ぐらいは哲学者でもあるように思えますが、かれらの強調するところは神学であり、絶対に哲学の問題に入らない、そういうことでもあります。

私自身は、できるだけ普遍的な立場に立ちたいと思っております。そして結局それは哲学者としての立場です。個人的な研究の歴史を申しますと、私はカトリック神学の研究と、プロテスタント神学の研究と、日本学、中国語学の研究を積んでまいりました。しかし、最終的に得た人生観、人間観、実在観から言えば、自分は哲学者であると思います。

2

これからの講演では三つのことをお話ししようと思っています。第一はヨーロッパ、あるいはドイツにおける仏教研究の諸段階、第二に新しいタイプの仏教研究の一例の紹介、第三はそれに対する私の批評、および未来への展望。

まず第一、つまりヨーロッパ、そしてドイツにおける仏教研究の諸段階からお話しします。これはだいたい、四つの段階に区別することができます。

ヨーロッパにおける本格的な、あるいは学問的な仏教研究は、だいたい1800年から1850年の間に始まりました。ヨーロッパといいますのは、イギリス、フランス、ドイツ、そしてロシアなどです。

たとえばイギリス人のホジソン(B. H. Hodgison)はネパールで大乗仏教の文献を見つけて、それをイギリスやフランスに送りました。その文献の中から、フランスのビュルヌフ（Eugene Burnouf）が *Lotus Sutra*、つまり『法華経』のテクストをフランス語に訳しました。そういう訳でヨーロッパでは、一番最初の段階でまず大乗仏教の研究が行われました。

次に1850年から1900年までは第二の段階で、仏教研究の傾向はだんだん小乗仏教の研究に変わりました。インドで、あるいはスリランカで文献が発見されてゆくにつれて、小乗仏教の研究になっていったのです。この第二の段階で一番有名なのは、パーリ聖典協会(Pali Text Society)の人々で、とくにマックス・ミュラー（F. Max Müller)の編集した、そしてリス・デビッツ（T. W. Rhys Davids）の協力した *Sacred Books of the East*、翻訳すれば『東方の聖典』というシリーズは、英訳で百巻以上もあるものです。非常に有名な叢書で、今もその英訳はよく使われています。もちろん、当時の学問的なレヴェルは今の学問的レヴェルとは違いますから、いろいろな間違いもありますけれども、後になってもあまり英訳の本が出てこなかったこともあって、この *Sacred Books of the East* は今日もよく使われております。

1900年から1945年までは第三の段階で、その特徴は、文献学的な仏教研究よりも、むしろ体系的な、比較的な仏教学研究になっていったという点にあります。比較的と申しますのは、もちろんキリスト教と仏教の比較も盛んでしたけれども、しかしこの第三段階においては、他にも様々なタイプの、体系的、比較的な宗教学が出てまいりました。一番有名なのはジョアキン・ヴァッハ(Joachim Wach)さん、体系的宗教学(Systematische Religionswissenschaft）において一番影響のあったクリスチャンの方の研究です。

ヴァッハさんの宗教学はだいたい次のように説明することができます。宗教(Religion)という研究対象には、まず特定の神学(Theologie)があります。たとえばキリ

スト教神学というように。それに対して、より普遍的立場に立とうとするのが哲学(Philosophie)ということになります。

もちろん、実際にはそれぞれの哲学者自身に、生まれつき、あるいは若いときからの自分の宗教的な立場がありますから、その哲学にもいろいろな文化的な制限がはたらきます。文化的な偏見もはたらきます。しかしとにかく、従来の“神学”に対して、宗教哲学(Religionsphilosophie)というものが考えられた。そしてそこから、宗教史研究(Religionsgeschichte)と体系的宗教学(Systematische Religionswissenchaft)という二つの研究の方向が出てまいります。

宗教史研究の考え方は、歴史的、いわば縦の切り方です。つまりそれは時間的な関係において、発展という観点から現象を研究する仕方です。それに対して体系的宗教学は、横の切り方、つまり同じ宗教現象の、世界中のいろいろな場所での現われ方を研究するものです。ですから時間的な関係ではありませんので、横の切り方といえます。そしてその体系的な宗教学の様々な方法論のなかで最も大切なものが、「比較」という方法であります。これがヴァッハさんの宗教学の枠組みです。

もう一つ、この第三段階において、“宗教という現象”を研究する学問が出てきました。それが宗教現象学(Phenomenologie der Religion)であり、レーウ(Garadus von der Leeuw)のものが一番有名です。けれどもこの宗教現象学は結局、体系的宗教学の一種であって、その背景にあるのは神学、それもプロテスタントの神学です。宗教現象学の使う概念は、キリスト教の神学に、特にプロテスタントの神学に影響された概念ですから、中立的な宗教研究とはいえない。

もちろん、中立的な研究が宗教について可能であるか、それは別の問題となりますけれども、とにかく当時の宗教現象学という傾向は、神学から出てきた。

第四の段階、1945年から1990年、つまりだいたい今日までの間に、もう一つの新しいタイプの神学、宗教という対象を持つ研究としての神学が出てまいりました。いわゆる Theologie der Religionen あるいは Religionstheologie、「対話のための神学」です。この神学の課題は、聖書に基づいて、世界中の宗教団体における、キリスト教の神の救済計画のもつ役割を究明することです。

もちろん、この Theologie der Religionen が出てくる以前にも、キリスト教の神学者たちは、キリスト教でない人々の宗教について考えてはいました。けれどもその時まではだいたい、キリスト教徒でない人の宗教は、いわば個人の宗教として見られていました。集団の宗教ではなく、あるいは、文化の現象としての宗教ではなく、外部の人の、個人的な宗教であると見なされていました。そして Theologie der Religionen が現われる前の考え方では、そのような意味での個人の宗教をもっている人、イエス・キリストを信仰しない人でも、良心が教える道を歩く人であるならば、神に救われる、という態度がとられていました。

たとえば、キリスト教の使う旧約聖書にはヨブの話が出てきます。ヨブという人がよく病気に悩まされて子供をも失う出来事があって、いろいろな苦しみに遭わせられるというような話です。旧約聖書では、このヨブという人は、神の命で聖なる人として救われているという判断でした。しかし、ヨブは実際のところはイスラエルの人ではなかった。隣の民族の人でした。こういう隣の民族の人についての救済の話は、旧約聖書の話によく出てきます。したがってその意味では、隣の民族、つまりイスラエルの民族でない人々も、個人としては救済の可能性をもつ、ということは、以前からも認められていました。

しかし Theologie der Religionen という新しいタイプの問題の捉え方が出てきてからは、個人のものではない、文化的な現象としての他宗教というものが、神学の問題として本格的に扱われるようになっていったのです。神学の問題として、というのはつまり、旧約聖書には、あるいは新約聖書には、そのような宗教現象一般について、神からのなんらかの判断が示されているか、そういう研究です。そしてそのために、旧約聖書や新約聖書の文献解釈の研究だけではなくて、それを踏まえた体系的な、哲学的な考え方も出てきました。

そしてその Theologie der Religionen のテーマの一つに、仏教が人類のなかでもつ役割を明らかにする、という課題がありました。まあ私の立場からいえば、仏教はそのときまで、神学者によって偏見をもって判断されていたと思います。

ではこうして現われた神学者の仏教研究とはどのようなものであったのか。その歴史を詳しく叙述している本がここにあります。最新の研究ですので、次にこの本をちょっと詳しく紹介したいと思います。

3

シュミット-ロイケルという若いカトリックの神学者が今年、博士論文を出版しました(Perry Schmidt-Leukel, *„Den Löwen brüllen hören“ Zur Hermeneutik eines christlichen Verständnisses der buddhistischen Heilsbotschaft*, Beiträge zur ökumenischen Theologie Bd.23, Ferdinand Schöningh 1992)。タイトルは「獅子に聞く

こと」、あるいは「獅子の声を聞きなさい」という命令の意味です。ここで獅子というのはもちろん釈迦牟尼仏のことです。釈迦牟尼仏陀の教えを聞きなさい、神学者としてそう言っているわけです。サブタイトルは、「仏教における救済の福音の、キリスト教的立場からの解釈、そのための解釈学的な基礎づけ」となっています。しかし「解釈学」(Hermeneutik)といっても、この人の解釈は独特の解釈であります。つまりハイデガーとかガダマーとの関係は薄い、シュミット-ロイケル独自の解釈学です。

この本の章は三つあって、第一章のタイトルは「キリスト教と仏教の比較研究の歴史」、第二章は「キリスト教と仏教との対話」となっています。そして第三章のタイトルは「キリスト教の仏教解釈」、これが本論です。本論の内容についてはあとでお話しするとしまして、はじめにその第一章と第二章から、断片的ですけれども、主要な彼の批判を紹介します。著者による従来の神学者への批判です。

まず第一章からまいります。今までのドイツ、あるいはヨーロッパにおける、神学者による仏教研究のタイプには二つありました。一つは、キリスト教と仏教の、apologetisch(護教論的)な傾向をもった比較。apologetischとは、キリスト教の教えを弁護する、キリスト教の教えを証明する、ということです。そういう意味で、私は「教弁論」という言葉を使います。「教弁論」的な傾向のあるキリスト教と仏教の比較、それが今までの研究の中で第一の種類である。その教弁論的な比較研究の中から出てくる仏教への批判のうち、一番中心的なものは、仏教は無神論であるということ。もう一つは、仏教は反文化的なものである、文化を否定する論であるということ。そういう二つの主要な批判点が、様々な本の中に出てくる。シュミット-ロイケルさんはもちろん、それが偏見による独断であると主張しています。彼はその批判に賛成することができません。

第二の種類のキリスト教と仏教の研究方法は、シュミット-ロイケルさんの言葉を使いますと、宗教現象学的な比較です。しかし先ほども申しましたように、宗教現象学は結局、中立的な宗教学ではなくて、それはキリスト教という宗教をモデルにして、すべての他の宗教を研究する学であるから、結局、この宗教現象学的なキリスト教と仏教の比較もまた、キリスト教の「教弁」になる。

宗教現象学の使う概念には、〈神〉や〈救済〉や〈罪〉、あるいは〈サクラメント〉(Sakrament)すなわち特別な儀式の概念、あるいはもうちょっと具体的に言えば〈受肉〉(Inkarnation)の概念、神が人間になるという考え方、そういった様々なものがありますが、これらは皆、キリスト教の概念がモデルになっています。ですからたとえば、インドのavatāra(〔神々の〕顕現)という考え方と、キリスト教の〈受肉〉の考え方、それを全部、一つの現象の様々な種類としてInkarnationの概念の下で理解すると、イエス・キリストの受肉が典型ということになって、他のものはみな欠陥のあるその変型になってしまう、そういう批判です。イエス・キリストのInkarnationの仕方が一番典型的なものと見られて、残るものは全部、その二次的、三次的なあり方であるとされてしまう。そういうことになりますから、シュミット-ロイケルさんはこの宗教現象学的なキリスト教と仏教との比較にも不満を持ちます。

次に第二章にまいりますと、第二章のテーマはキリスト教と仏教の対話、ダイアローグです。そのようなダイアローグの実践はだいたい、第二次世界大戦のあとに出てきましたが、今までのダイアローグにも問題がある、とシュミット-ロイケルさんは主張します。

今までのダイアローグは、特にドイツの情況を見ますと、ある神学者のグループはダライ・ラマとその周りの人々、つまり、チベット仏教との対話をよくやっています。別のグループは、日本の京都学派、大乗仏教の中から出てきた宗教哲学として京都学派との対話をよくやっています。たとえばハンス・ヴァルデンフェルスさん。ボン大学の神学者で、京都学派の西谷先生についた方です。今度本を出されました。このヴァルデンフェルスさん、あるいは南山大学のヴァン・ブラフトさん、ハイジックさんなど、彼らのダイアローグは、日本の大乗仏教との対話であって、チベット仏教との対話はありません。

またさらに別の神学者のグループもあって、彼らは昔から、つまり十九世紀から、小乗仏教、スリランカの仏教との対話を盛んに行ってきました。それはシュミット-ロイケルさんも属しているグループです。彼はよくセイロンの人々と話をしたり、研究したりしています。

そういうわけで、ドイツには少なくとも三つの異なる対話のグループがあることになります。チベット仏教との対話、日本の大乗仏教との対話、そしてスリランカの小乗仏教との対話。しかしそれら相互の対話がない。それが批判の一つです。チベット仏教と京都学派とスリランカ仏教の間、つまり、仏教者同士の間にそういう対話がない。キリスト教側の、対話する神学者の間だけでなく、その相手である仏教者それぞれの間にもダイアローグがあって欲しいのに、それがない。それが第二の批判です。

シュミット-ロイケルさんが求めるものは、キリスト教者一般と仏教者一般との対話です。そのために、キリ

スト教は自分たちすべての宗派に共通する教えを提示しなければなりません。自分の信仰をある決まった定型で描けなければなりません。つまり思想のフォーミュラ、基礎となる図式、自分の信仰を図式をもって説明するためのそういうものが、対話のためには必要です。

キリスト教の神学者たちが一つの共通の場、共通の教えの場を設けること、そしてまた仏教者の側もそのような、対話のための共通の教えの場を作ること、それが彼の望みです。なかなか難しいですけれども、とにかく対話のためにはそれが必要です。今まではそれがなかった。

そして、今度は第三章の内容についてちょっと説明しますと、彼は、今まで仏教者からそういうフォーミュラが出されていないから、一つの共通した教えの場がないから、私がこれからそれをやりましょう、と言う。私はキリスト教者なりに仏教の普遍的な教えを、つまり共通の教え、宗派を越える教えを示したい。もちろん、新しい方法をもって、つまり新しい解釈学をもって。私は、つまりシュミット-ロイケルさんは、それをこれから三百頁かけてやりたい、そしてそれを本論としたい、と。

ですからその第三章、この本の本論は、釈迦牟尼から始まってナーガルジュナ、さらに中国仏教の教えを通って日本仏教、親鸞にまで至ります。そして、一番最後に、親鸞の本格的な仏教性を証明しています。

今までヨーロッパの神学者の間によくあった阿弥陀仏の仏教に対する偏見は、阿弥陀仏の仏教は本当の仏教でないというものでした。それに対してシュミット-ロイケルさんは本書で、阿弥陀の仏教、特に親鸞の仏教は本当の仏教である、仏教の最頂点であるという立場に立ち、親鸞の解釈した阿弥陀仏の仏教が、本格的な仏教としての性格をもつものであることを証明するために力を尽くしています。

親鸞解釈のためのテクストとしては、よく上田義文という有名な先生の英訳が出てまいります。つまりシュミット-ロイケルさんはパーリやサンスクリットの知識を持っていますけれども、中国語と日本語の知識を持っていませんから、英訳に依らなければなりませんでした。そこで英訳の浄土教文献、あるいは浄土真宗文献のほとんどを読んでみて、とくに鈴木大拙と上田義文の解釈に依ることにしたわけです。

そのようにして上田義文のテクストを使い、引用しながら、シュミット-ロイケルさんは、阿弥陀と、阿弥陀の信仰者の関係が単に“等しい”という状態だけでなく、同一性、アイデンティティをもっていることを強調します。阿弥陀と悪人、あるいは凡夫の間には、禅におけるダルマと本人の合一と同じような関係がある。つまり阿弥陀は悪人凡夫の本来の自己である。阿弥陀と悪人凡夫の間にアイデンティティがある。だから、阿弥陀仏の仏教も本格的な仏教である。禅のような解釈とも共通する、普遍的な仏教の教えが示されている。そうシュミット-ロイケルさんは主張します。

4

ここで少しわたしから問題点を指摘しておきたいと思います。もっとも、今わたしが省略したかたちで紹介しただけなので、シュミット-ロイケルさんにとっては不公平であるかもしれませんけれども、とにかく、以上でこの本のだいたいの傾向を話し終えたので、ひとつ言っておきます。

それは今のドイツにおける仏教研究者の、外国語の知識という問題です。上田義文の英訳テクストの中には、equality という言葉がよく出てきますが、これは日本語で言えば「等しい」です。「同一」つまりアイデンティティではない。ところがシュミット-ロイケルさんは、equality という言葉をいつもアイデンティティとして解釈しています。しかし日本語では、つまり親鸞の手紙のなか、あるいは他のいろいろな親鸞の文献のなかには、阿弥陀と悪人凡夫の「同一」を意味する言葉は出てこないはずです。阿弥陀は最後まで「他力」です。「他」であって「自」ではない。

シュミット-ロイケルさんは、禅的な解釈とも共通するような、「他」と「自」を越えた新しい「自」を親鸞が説いたと強調しています。それは私の、あるいは今までの親鸞解釈から言えば危険な話です。つまり親鸞の解釈としては問題があると思います。テクストと対照して親鸞の教えを理解する限り、阿弥陀仏は、もちろん他とはいっても絶対的な、相対を超えた他ですけれども、あくまで他です。シュミット-ロイケルさんは英訳を使ってさっきのような解釈をしております。英訳の文章では、equality と identity の区別というような難しい、細かい問題は出てこないのです。

5

先ほど申しましたように、このシュミット-ロイケルさんの本のタイトルは、獅子である釈迦牟尼の教えを聞きなさい、対話をしなさいという命令の意味です。では対話のためには何が必要か。そこでかれは、わたしたち人間には共通の経験があり、その共通の経験の上に対話が可能となる、と考えます。この共通の経験は「人間としての基礎経験」(Menchliche Grunderfahrungen) と呼ばれています。これはシュミット-ロイケルさん独自

の言葉です。

「人間としての基礎経験」は全ての人間にある、そう主張するわけです。この基礎経験とは具体的にどういうものかというと、この本には次のような例が挙げられています。〈生まれること〉と〈死ぬこと〉、〈男であること〉あるいは〈女であること〉、〈反省すること〉つまり考えること、〈人格をもつこと〉責任をもって生活すること、一種の自己判断、自己意識を持つこと。

そして彼はこの基礎経験を、今までの神学者がよく用いてきたGotteserfahrungという概念と区別しています。基礎経験はGotteserfahrungつまり神の経験ではない。日本語でどのように言ったらいいのでしょうか。神を経験する、とは変かも知れませんけれども、とにかく文字通り翻訳すれば「神の経験」、それとこの基礎的経験は違うものである。それからもうひとつ、Transzendenterfahrungという概念、これとも区別します。基礎経験は超越的（transzendent）経験でもない。もちろんこれらと関係はありますけれども、しかし彼はわざとそのような表現を避けて、基礎経験という言い方をしています。

それからもうひとつはSinneserfahrung。シュミット-ロイケルさんはこの概念をある程度まで肯定しますが、結局最後には使いません。Sinnは「心」「意味」「感覚」を意味しますから、この言葉はより広い意味をもっていますけれども、彼はそれを使いません。その代わりに経験、基礎経験という概念を使います。

どうしてかというと、これは一番深い、実践的なレヴェルで言われているからです。つまり、経験のVorstellung、表象から区別された、経験そのものを示しているわけです。経験の表象、あるいは表現された経験、そうしたものの下に、深層の経験がある。人生そのものの経験がある。無名の経験、名前のない、名づけられない経験、それを対話のための神学の出発点にしたい。

そういう意味で彼は、仏教とキリスト教の間には、基礎的な経験のレヴェル、人生経験のレヴェルでなにかの共通の場がある。そしてこの共通の場から、私たちは対話をはじめることができる、と考えます。表象、表現の次元に戻りますと、まただんだん文化的な相違が出てきますけれども、その文化を作った経験のレヴェルでは対話ができますから、そこを共通の場とするのです。

そのためにもキリスト教神学者は、これからは仏教の宗教的な実践によく参加しなければなりません。逆に言えば仏教者も、キリスト教者の生活によく参加しなければなりません。その共通の経験の場を広げるためにです。共通の経験をできるだけ広げなければなりません。そういう意味で、神学者は日本に来て、日本のお寺で様々な宗教行事に参加する。あるいは、宗教をもつ人、宗教の実践をよくやっている人の生活そのものに参加する。逆に、日本の僧侶の方がドイツへ来られて、そこでいろいろなキリスト教徒の家族のなか、あるいは団体のなかの生活に参加する。そういうことは大事です。それは対話のための一番基礎的な経験をintensify、より強めるものだと思います。

6

シュミット-ロイケルさんの本について話してまいりましたが、全体としては、これは新しいタイプの、価値のある良い研究だと思います。ただ先ほども申しましたような外国語の知識の問題があります。それから最後の、外国での経験ということですが、普通は本格的な神学者は外へ出ないです。ずっと自分の団体の内に居る人が多くて、外国での他の文化の経験のある神学者は珍しいのです。シュミット-ロイケルさん自身、そういう経験を述べています。彼はスリランカで生活したことがありますけれども、彼のようなタイプの神学者が出てくる以前の人々は、大体、神学者として、あるいは大学の教授としての自分の実際の生活をなかなか離れようとしない、そういう立場を守ってきました。

有名な話がありまして、ある老インド学者、と同時に神学者でもある人の話ですが、彼があるとき若いインド学者に会いました。するとその若い学者が、これからインドへ行きます、インドでFeldforschung、フィールド研究をします、現場で研究しますと言ったんです。しかし、その年寄りの先生は、どうして行くのですか、と。インドは汚いのに。インドへ行く必要はありませんよ。

そう言ったということです。この話は、ある時代までの研究の態度をよく表現する話です。つまりかつては、大学に図書館がありますから、本がありますから、インドまで行かなくても仏教研究ができると考えられていた。特に小乗仏教文献の研究などの場合は。

そこへシュミット-ロイケルさんのような新しいタイプのキリスト教神学、神学者が出てきたわけです。わたしは最後に紹介したこの本の意見に賛成です。そういう意味で本日は、とくに現在のドイツ神学者の仏教観を中心にお話しさせていただきました。ご静聴ありがとうございます。

Fourth International Buddhist-Christian Dialog Conference
30 July–3 August 1992, Boston

1992 AAR/SBL Annual Meeting
21–24 November 1992, San Francisco

「第4回国際仏教・キリスト教対話会議」及び「1992年度アメリカ宗教学会大会」参加報告

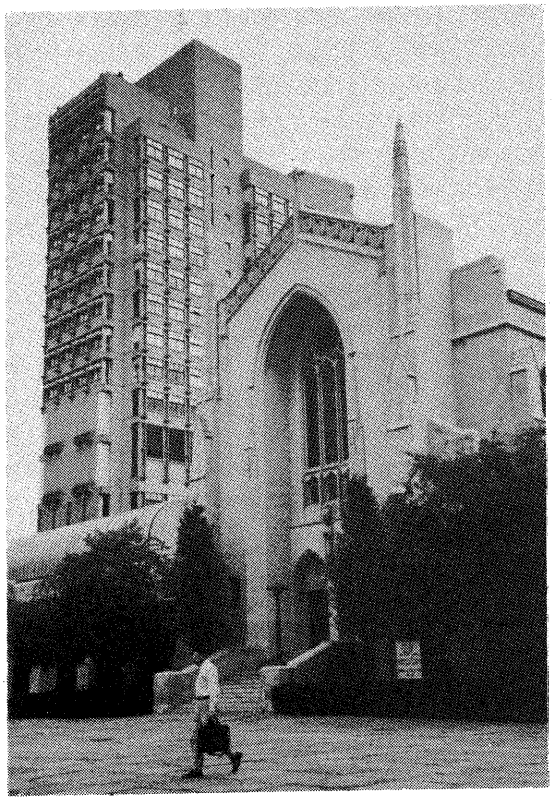
研究員・専任講師　ロバート・F・ローズ

最近の欧米における宗教研究は、多くの新しい方法論を導入し、目ざましく変化しつつある。特にアメリカの宗教学者は、デリダやフーコーの思想、あるいはギアーツ(Clifford Geertz)やターナー(Victor Turner)の文化人類学的アプローチ、又はブルデユー(Pierre Bourdieu)の社会学にもとづいて、次々と興味深い研究を世に送りだし、米国の仏教研究にも多大な影響を与えている。また多くのキリスト教神学者たちは、他の宗教に関心を抱くようになり、仏教とも熱心に対話を行なっており、仏教学者に大きな影響を与えている。海外の仏教研究の動向を調査することを一つの課題とする国際仏教研究班は、このような欧米の宗教研究・宗教間の対話の発展などを無視することは当然できない。そこで国際仏教研究班の研究活動の一環として、私は1992年に米国で開催された第四回国際仏教・キリスト教対話会議（Fourth International Buddhist-Christian Dialog Conference）と1992年度アメリカ宗教学会大会（The 1992 Annual Meeting of the American Academy of Religion）に参加し、欧米の研究者と意見交換を行ない、資料収集に勤めた。以下、この二つの学会について報告する。

I

第四回国際仏教・キリスト教対話会議は、1992年の7月30日から8月3日まで、米国のボストンにおいて開催された。その名の通り、これは仏教とキリスト教の対話を促進するために設立された世界的規模の学会で、四年に一度、定期的に大規模な大会が開催されている。今回の会議は、仏教・キリスト教学会（Society for Buddhist Christian Studies）、ボストン神学校（Boston Theological Institute; これはボストン近郊にある神学校の連盟である）とボストン大学神学校（Boston University School of Theology）の主催のもと、ボストン市の中心を流れるチャールズ川のほとりにキャンパスをもつボストン大学で開催された。主催者によると、17か国より300人ほどの参加者があったという。

さて、この国際仏教・キリスト教対話会議は、1980年に、ハワイ大学宗教学部のデウィッド・チャペル教授（Professor David Chappell）とジョージ田辺教授（Professor George Tanabe）が、ホノルル市内のいくつかの宗教団体に呼びかけて行われた宗教間の対話から出発しているということである。この一連の対話の集会に大きな反響があり、その結果、同じく1980年には、東西宗教プロジェクト（East-West Religions Project）が発足し、その主催のもとで、「東西宗教の出会い—仏教・キリスト教の再生と人類の未来」（East-West Reli-



gions in Encounter: Buddhist-Christian Renewal and the Future of Humanity）というテーマで、第一回国際仏教・キリスト教対話会議が開かれた。この会議には50人ほどが出席したようである。きわめて少規模の会議であったが、世界各国から仏教とキリスト教との対話に関心を持つ学者や宗教者が一堂に会したという点で、非常に重要な意味をもった会であった、と評価されているようである。この会議を期に、*Buddhist-Christian Studies* という学術雑誌の発行が始まり（編集者はチャペル教授)、また日本においても、土居真俊教授を中心として東西宗教プロジェクトの日本支部が開設された。

さらに、第二回の会議も、ホノルルで1984年に開催されたが、この会には150人の参加者がいたというから、四年間の間で、いかに仏教とキリスト教の対話についての関心が広まったかを知ることができる。この会では、日本の中村元博士とドイツの著名な神学者の Hans Küng 教授との対話が行われ、たいへん好評であったと聞く。

前回の会議（第三回目の会議）は、カリフォルニア州のバークレイ市で1988年に行われた。そのテーマは、「仏教とキリスト教—人類の未来に向けて」（Buddhism and Christianity: Towards the Human Future）というものであった。この会には800人もの参加者があり、仏教とキリスト教の対話が非常に大きな世界的関心事になったことを示している。仏教とキリスト教の対話を促進するための学会として、仏教・キリスト教学会が設立されたのもこの時であった。

II

さて、このような歴史を背景にして、第四回目の国際仏教・キリスト教対話会議がボストンで行われることになったのであるが、今回のテーマは「仏教、キリスト教と地球的治療」（Buddhism, Christianity and Global Healing）であった。プログラムには興味深い部会がいくつも設けられており、どれに参加しようかとたいへん迷った。そこでやや長くなるが、プログラムの主な部会などを紹介しておきたい。

Plenary Sessions

Plenary 1: Mutual Transformations. Professors Fred Streng and Rita Gross

Plenary 2: Buddhist-Christian Practice. Sr. Pia Gyger and Fr. Niklaus Brantschen

Plenary 3: Ecology. Professors Rosemary Ruether and Chatsumarn Kabilsingh

Plenary 4: Buddhist-Christian Dialogue in Japan. Ryomin Akizuki Roshi and Professor Seiichi Yagi

Plenary 5: Faith. Professors John Cobb and Taitetsu Unno

Plenary 6: Community and Diversity. Professors Diana Eck and Suwanda Sugunasiri

Working Groups

Group 1: Buddhist-Christian Theological Encounter Group. Topic: "Upaya and Truth."

Group 2: Zen Awakening and Christian Contemplation — Practice in Both Traditions

Group 3: A Mahayana Reading of the Gospel of Mark

Group 4: Ethics and Sunyata

Group 5: Dialogue with Nishida's Philosophy

Group 6: Buddhist-Christian Dialogue and Ecology

Group 7: Bibliography for Buddhist-Christian Dialogue

Group 8: Korean Group

Group 9: Symbiotic Communities

Panel Discussions

Panel 1: Compassion as Cognition — The Healing Power of Non-Emotional Involvement in Buddhism and Christianity. Chair: Arvind Sharma

Panel 2: Donald Mitchell's *Spirituality and Emptiness* — The Dynamics of Spiritual Life in Buddhism and Christianity. Chair: Bonnie Thurston. Respondent: Donald Mitchell

Panel 3: How Deconstruction Heals. Chair: Robert Magliola

Individual Sessions

1. Social Ethics in Comparative Perspective
2. Art and Wholeness in Buddhism and Christianity
3. Women and the Feminine in Dialogue and Healing
4. Personal Transformation in Buddhist and Christian Perspective
5. Beyond Anthropocentrism in Buddhist and Christian Environmental Ethics
6. Issues in Interpersonal and Communal Healing
7. Topics in Comparative Buddhist-Christian Studies
8. Resources for an Environmental Ethic
9. Foundations for Buddhist-Christian Dialogue

10. Buddhist and Christian Perspectives on Ecology
11. Lay and Monastic Communities — Issues of Communal and Global Health
12. Selected Topics in Buddhist-Christian Studies

このプログラム中の plenary session は「全体部会」とも訳すべきもので、特別講演の性格を持つ。今回は六つの plenary session がもたれたが、各会は、二人の著名な学者が、共通のテーマについて対話を行うという形式で進められた。また working group は、一つのテーマについて、時間をかけて対話を行なう部会のことで、一般の部会（individual session）が一回限りで終るのとは違い、working group は会議開催中、毎日行なわれ、四日間を費やして、共通テーマについて徹底的に論議し合う場所である。この working group は前回のバークレイ大会で試験的に導入されたが、今回の学会では一つの重要な柱となっていた。

今年の学会の特徴の一つは、環境問題と（身体的精神的）治療（healing）という二つのテーマが大きく取り上げられた点にある。学会のテーマの「仏教、キリスト教と地球的治療」でもこの点を反映しているが、特に環境問題が学会全体の大きな焦点となっていたように思われた。プログラムには Beyond Anthropocentrism in Buddhist and Christian Environmental Ethics（「人間中心主義を超えた仏教とキリスト教の環境倫理」）、Resources for an Environmental Ethic（「環境倫理の資源」）、Buddhist and Christian Perspectives on Ecology（「環境問題についての仏教とキリスト教からの視点」）などの部会が設けられていた。アメリカ人の環境問題に対する関心の深さを象徴しているように思われる。さらに、従来の対話の目標は、仏教徒とキリスト教徒がお互いに理解し合うことにあったようであるが、ここでは仏教徒とキリスト教徒が、共に直面している地球的規模の環境問題に、いかに協力して対応してゆけるか、ということが語り合われた。対話は「お互いに出会う」時代から、「お互いと協力しあう」時代に変りゆく姿を見た感が深かった。

Ⅲ

私はボストンに到着する以前から、学会のプログラムを入手していたが、先にも述べたように、あまりにも多彩な発表が予定されていたので、どの発表を聴こうかと迷っていた。しかし学会初日に会場へゆくと、そこで思いがけず、本学の堀尾孟教授に出会った。堀尾教授は永年京都で行なわれてきた Kyoto Zen Symposium に関わっておられるが、このシンポジウムのメンバーの数人が中心となって「倫理と空」（Ethics and Sunyata）という working group を結成してボストン入りしている、と聞いた。私も仏教の倫理観については以前から関心を持っていたので、堀尾先生のお招きに従い、この working group に参加することにした。

「倫理と空」の working group は、四日間にわたり開かれ、毎回二つほどの発表があり、それらに対する反論（response）の後、ディスカッションが行なわれた。このグループのメンバーとその発表は、次の通りであった。

Chairperson: 延原時行（敬和学園大学）
竹中智泰（常葉学園大学）. "Religion and Ethics in Ancient India."
桐田清秀（花園大学）. "Buddhism and Social Ethics: The Significance of our Theme and a Few Proposals."
川村永子（大阪府立大学）. "The Pursuit of New Values for Ecological Survival: From the Standpoint of Absolute Nothingness."
松丸寿雄（独協大学）. "Freedom and Sunyata (Emptiness) in the Philosophy of Keiji Nishitani."
Whalen Lai (University of California at Davis). "Sunyata and Ethics: As Evidenced in Popular Literature."
堀尾孟（大谷大学）. "The Character of the Way."
Christopher Ives (University of Puget Sound). "Seeing Pitfalls Just as They Are: Towards a Sound Basis for Zen Ethical Reflection."
Charles R. Strain (DePaul University). "Teleology and Ethics: A Christian-Buddhist Encounter."

それぞれ個性的な発表であったが、特に飛び入りで参加

されたシカゴのDePaul大学のCharles Strain教授の発表には、啓発されるところが多かった。Strain教授はPoliticial TheologyまたはLiberation Theologyの視点から、Richard NeibhurのChrist and Culture、HodgsonのGod in History、さらには西谷啓治と阿部正雄両博士の思想を取り上げ、宗教と倫理の関係について考察しつつ、社会の変革をもたらすことのできる新しい宗教的実践の論理を模索された。具体的な文献を示しながら、仏教とキリスト教の社会的実践について、かなり深く踏み込んだ発表であった。今学会で最も注目されるべき発表の一つであったように思われる。

この学会に参加することによって、私が以前はあまり関心をよせていなかった仏教とキリスト教との対話について、多く学ぶ機会を与えて頂いた。そしてこの学会に参加した経験を踏まえて、今後も、国際仏教研究班の研究員と共に、積極的にキリスト教や他の宗教との対話を進めて行きたいと思う。

Ⅳ

さて次に1992年度アメリカ宗教学会大会について、簡単に報告しておきたい。この学会は、11月21日から24日まで、サン・フランシスコのヒルトン・ホテルで開かれた。アメリカ宗教学会（AAR）については、1991年度大会に出席した加来雄之研究員の詳しい報告が「研究所報」28号に掲載されているので、それを参照していただければ幸いである。

1992年度の大会には、当時真宗総合研究所所長の武田武麿教授と共に参加した。AARの学会は大変大きなものであり、200近い部会が設けられ、あらゆる方面から宗教を論じた研究発表が行なわれた。また例年の通り、同時に聖書文学学会（Society for Biblical Literature）もヒルトン・ホテルを会場として開かれ、ホテルとその界隈は毎日多くの人でにぎわった。

さて、今年のAARでは、仏教に関する部会が六つ設定されていた。それらは次のようなものである。

1. Mahayana Philosophies of Language. Chair: Collett Cox (University of Washington).
2. The *Lotus Sutra* as a Vehicle for Teaching Buddhism. Chair: Peter N. Gregory (University of Illinois at Champaign).
3. A Discussion of Bernard Faure's *The Rhetoric of Immediacy*. Chair: Robert E. Buswell (UCLA).
4. Theravada Buddhism and the Idea of "Tradition": Books, Relics, Images. Chair: Steven Collins (University of Chicago).
5. Roundtable Session: Interpreting Buddhist Ethics. Chair: Paul K. Nietupski (Columbia University).
6. Topics in Buddhist Studies. Chair: Richard Payne (IBS).

さらに、これらの仏教の部会とは別に、中国宗教、ヒマラヤ・チベット宗教、日本宗教、韓国宗教の各部会にも仏教に関するパネルが設けられたので、それらも付け加えておきたい。

Chinese Religions Group and Japanese Religions Group

1. The Buddhist Vinaya in China and Japan (Parts 1 and 2). Chair: David Kalupahana (University of Hawaii). Respondent: Stanley Weinstein (Yale University)

Himalayan and Tibetan Religions Consultation

1. Politics and Religion in Nepal and Tibet. Chair: Todd T. Lewis (College of the Holy Cross)

Japanese Religions Group

1. Postmodernism and Japan. Chair: John C. Maraldo (University of North Florida)
2. Humor and Japanese Religions. Chair: Thomas P. Kasulis (The Ohio State University)
3. Japanese Religions and the Beat Poets. Chair: David L. Barnhill (Guilford College). Respondent: Daniel C. Noel (Vermont College of Norwich University). Held in conjunction with Arts, Literature and Religion Section.

Korean Religions Group

1. Enlightenment and Cultivation in Korean Son (Zen) Buddhism. Chair: Young-chan Ro (George Mason University). Respondents: Kang-nam Oh (University of Regina) and Peter N. Gregory (University of Illinois, Urbana)

この外にも、仏教に直接的、あるいは間接的に関わる発表が他の部会で多数行なわれたが、それらは省略することにして、先に挙げた部会の中から、特に注目に値すると思われた二つの部会について、記しておきたい。まず第一に、ワシントン大学のコレット・コックス（Collett Cox）教授がチェア・パーソンを勤めた「大乗仏教の言

語思想」(Mahayana Philosophies of Language) と題された部会は、今大会の仏教関係の部会の中でも、最も注目されたものの一つであった。この会の発表者とその発表題目は次のようなものであった。

John P. Keenan (Middlebury College). "Mahayana Philosophies of Language: Two Basic Yogacara Texts."
Dan Lusthaus (University of Illinois, Urbana). "Sound, Construction, Conditioning: The *Ch'eng Wei Shin Lun* on Language."
Jose Ignacio Cabezon (Iliff School of Theology). "On the Nature and Function of Language in Indo-Tibetan Buddhist Thought."
Jacquline Stone (Princeton University). "Not Mere Written Words: Perspectives on the Language of the *Lotus Sutra* in Medieval Japan."
Dennis E. Lishka (University of Wisconsin, Oshkosh). "Issues in a Rinzai Zen Theory of Language: Takuan's Epitome of Lao-tzu."

発表題目から知られるように、ここでは主にインド、チベット、そして日本の仏教における言語観が取り上げられたが、その中でも特に興味深かったのは解深密教や摂大乗論の言語観を考察したジョン・キーナン教授の発表と、日連の言語観についてのジャクリーン・ストーン教授のペーパーであった。さらに、このパネルとならんで、私の関心を引いたのは、ハワイ大学のカルパハナ教授をチェア・パーソンとして、中国宗教グループ (Chinese Religions Group) と日本宗教グループ (Japanese Religions Group) が合同で開いた「中国と日本における戒律思想」(The Buddhist Vinaya in China and Japan) であった。実はこの部会は、長年アメリカの仏教研究 (特に中国と日本仏教の研究) をリードしてきたエール大学のスタンレー・ワインスタイン (Stanley Weistein) 教授の Festschrift を兼ねたものであり、発表者は皆ワインスタイン教授のもとで学んだ人々であった。その発表者と発表題目は次の通りである。

John R. McRae (Cornell University). "Tao-hsuan's Visions of Jetavana and the Ordination Platform Movement in T'ang China."
David W. Chappell (University of Hawaii). "The *Platform Sutra*'s Formless Repentance in Comparative Perspective."
Timothy H. Barrett (University of London). "The Lin-huai Ordination Scandal in Historical Perspective."
James C. Dobbins (Oberlin College). "Buddhist Precepts in the Jodoshu."
William M. Bodiford (University of California, Los Angeles). "Bodhidharma's Precepts in Japan."
Paul Groner (University of Virginia). "The Re-establishment of an Order of Nuns in the Risshu Nunneries of Medieval Japan."

発表後は respondent として参加したワインスタイン教授自身が各発表について厳しい批評を加えられた。これらの発表はすべて戒律思想の歴史において重要な課題を取り上げたものであったが、特に日本の戒律についての研究発表は学問的レベルの高いものが多く、アメリカの仏教学の発展に与えたワインスタイン教授の影響の深さを改めて考えさせられた。

以上のように、第四回国際仏教・キリスト教対話会議と1992年度アメリカ宗教学会大会について簡単に紹介したが、これらの学会に参加してアメリカの仏教学の持つエネルギーと、常に新しい学問的方法論を吸収することにより、ややもすれば閉鎖的になりがちの仏教学を学的に開放しようとする姿勢に再び直接触れることができたことは、私にとって大きな刺激になった。最後に私をこれらの学会に派遣してくださった真宗総合研究所と国際仏教研究班に感謝して、報告を終えたい。

1993年度前期　大谷大学開放セミナー

1993年度前期開講の「大谷大学開放セミナー」は、5月12日から7月17日にわたり、多目的ホールを会場にして開催された。今回は、真宗学の神戸和麿教授による「王舎城の人びとの救い—観無量寿経に聞く—」と、教育学の大竹鑑教授による「清沢満之の教育論—教育本質論的考察—」の二つの公開講座が開かれた。二つの講座の概要、各回のテーマと日程は、下記のようであった。

王舎城の人びとの救い—観無量寿経に聞く—

講　師　大谷大学教授　神戸和麿（真宗学）
期　間　5月12日(水)～7月7日(水)〈5回〉
時　間　水曜日　午後6時30分～8時30分
会　場　大谷大学多目的ホール
参加費　5,000円
概　要

王舎城（ラージャグリハ）とは、インドのマダガ国の城塞都市で、マガダの首都として知られていた。そのマガダの王城は頻婆娑羅王(ビンバサーラ)および王の子である阿闍世太子(アジャータシャトル)が築いたところである。当時、仏陀時代(紀元前五～六世紀)の頃、インドの国は十六の中小諸国に分かれ部族間の戦いが相続いていた。その中でマガダ国はコーサラ国と並んで三大強国となり、ガンジス川流域一帯の覇者として王権をふるっていた。

仏陀の教えは、そのような政治的な状況、またインド古来のバラモンの司祭者による宗教、文化、そして、反バラモンの六師外道の諸思想の中に興起してくるのである。その意味では王舎城の悲劇は単なる王位継承騒動ではなく、政治、文化、宗教の諸思想が複雑に絡み合う中に起こった出来事といえる。

『観無量寿経』に登場する頻婆娑羅王、そして王の妃、韋提希夫人(ヴァイデーヒー)は、仏陀の教えに帰依し生きた人々である。しかしそのような中で、仏陀が在俗の王をはじめとして多くの人びとから迎えられ、また仏の僧衆(共同体)が土地、財の寄進を受けることを、日頃から妬ましく思っていた者がいた。法(ダルマ)に生きる仏陀を見ずして、名誉の心、利益の心で仏陀を見ていた人物、提婆達多(デーヴァダッタ)がいたのである。その提婆の悪計の誘惑によって、阿闍世太子は父の王と母を牢獄の中に幽閉してしまう。そのことが王舎城の悲劇の発端となる。

その悲劇は、古代インドに起った一つの悲劇ではなく、人間の貪憎、また確執の中に、いつの世にも生起しているところの悲しい出来事である。仏陀は、その人間の悲劇(無明)、人の苦しみ、悲しみの中に何を教え示されたのだろうか。『観無量寿経』に尋ねたい。

第1回　5月12日(水)　王舎城の悲劇
第2回　5月26日(水)　浄土を求めて—カースト制を超えて—
第3回　6月 9日(水)　阿弥陀仏の国—蓮華の王の座—
第4回　6月23日(水)　世尊の微笑と韋提希
第5回　7月 7日(水)　阿闍世の救い

テキスト　『現代の聖典』（東本願寺出版部）
　　『真宗聖典』　（東本願寺出版部）

清沢満之の教育論—教育本質論的考察—

講　師　大谷大学教授　大竹　鑑（教育学）
期　間　5月22日(土)～7月17日(土)〈5回〉
時　間　土曜日　午後2時00分～4時00分
会　場　大谷大学多目的ホール
参加費　5,000円
概　要

「清沢先生によく知られた智増の菩薩、悲増の菩薩の教訓があって、先生は伝導教化を拒否して内面的求道を強調せられたように解されているけれども、決してそうではない。清沢先生には、強い教化への願いがあった。あの精神主義は、先生が教化の課題を果たし遂げられた仕事であったというてよいだろう。」

これは病床の曽我量深師が亡くなる二ヶ月前の言葉として、寺川俊昭現大谷大学学長が伝えるものである。

清沢満之は幼い頃から人にものを教えるのが好きだったといわれ、教育ということについては、もともと満之は適性をもっていたらしい。満之の教育力、感化力については、多くのエピソードによっても想像しうるが、それは彼の学問研究と信仰とが相俟ってより強化されたと思われる。「師の在世時代に親しくその警咳に接したものにとりては、この感化力は実に活きた信仰の脈打ちとなって、彼らの心臓の響き徹したに相違ない」（鈴木大拙）という言葉にそれはうかがわれ、「古代の僧伽を目前に見るが如く」（常磐大定）と語られた浩々洞に一つの教育の典型的な姿を見ることができる。

いうまでもなく、満之の思想と業績は深く大きい。彼は仏教近代化の百年の歴史のなかで一際鮮やかな光彩を放つ存在である。その全貌を探り明らかにする作業は絶えずなされて来た。今回は満之の教育論およびその活動の教育的意味に注目したい。あるいは、葦の髄から天井をのぞくことになるかも知れない。私としては、満之の思想と業績の全体像に迫る一つの橋頭堡のつもりである。

第1回　5月22日(土)　存在が教育する人間
第2回　6月 5日(土)　教育が存在を規定する時代
第3回　6月19日(土)　存在は生成であり同時に破壊である思想
第4回　7月 3日(土)　「其心至慈、其用至毒」の教育的意味
第5回　7月17日(土)　「議論と大笑い」の教育的意義

大谷大学開放セミナー　　特別公開講座

日時 1993年4月13日
場所 本学講堂

文学部・国際文化学科開設記念 短期大学部・文化学科開設一周年記念
大谷大学開放セミナー特別公開講座

チベットの医学と仏教

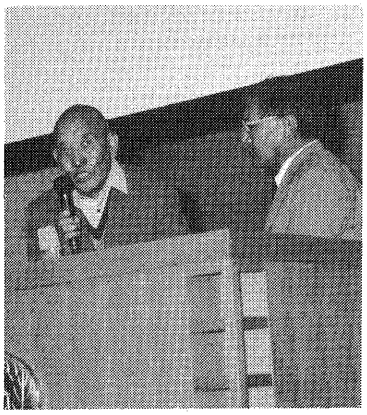
ダライ・ラマ法王侍医　テンズィン・チョウダク博士
解説　山本哲士医学博士

チベット医学のはじまりについては、紀元前ニャティ・ツェンポ（gnya' kri btsan po）の時に、あるいはインドの釈尊の時代に、チベットではボン教の医学があったといい、あるいは二世紀の頃インドから医学がもたらされたとも言われています。その後ソンツェン・ガムポ王（srong btsan sgam po）の時代、七世紀の頃、イラン、インド、中国の医者がやってきて医学がはじまったともいいます。

八世紀のティソン・デツェン王（khri srong lde btsan）の時、サムイェー寺でインド、中国、モンゴル、ネパール、カシミールから医者が集まって医学学会が開かれ、医学が発展しました。その頃ヴァイローチャナ（bai ro ca na）という人によって、ナーガルジュナ（klu sgrub）やその他の医学書がチベット語に翻訳されています。その当時の最も優れたチベットの医学者は、ニマン（古）・ユトク・ヨンテン・ゴムポ（snying ma g–yu thog yontan mgom po）でした。彼はティソン・デツェン王の侍従医として信頼厚く、ヒマラヤのいろいろな薬草を研究し、様々な文献を集めて、18章からなる『メンシュン・チャラ・チョプギェー（*sman gzhun cha la bco brgyad*）』という医学書を著わしました。

十一世紀にサルマ（新）・ユトク・ヨンテン・ゴムポがあらわれ、それまでにあった医学をまとめ、比較検討して、『ギュシ（四部医典 *rgyud bzhi*）』という156節からなる膨大なチベット医学の根本典籍を作りました。十七世紀に、ダライ・ラマ五世の摂政サンギェー・ギャムツォ（sde srid sangs rgyas rgya mtsho）がそれまでの医学を集大成して、『ヴァイデューリヤ・ゴンポ（*bai D' urya sngon po*）』を著わしました。そして、医学を研究する学生のために、医学の内容を図説したタンカ（掛け軸）がつくられました。

ロシアのチェルノブイリ原発事故で、多くの人々が放射能汚染で苦しんでいました。私はロシアに行き、24人を診察しました。ある人はただ死を待つのみの状態であり、またある人は牛乳を飲んだために発病するという状態でした。私はチベット医学の薬を投与しました。一か月もするとみんなすっかりよくなりました。チベット医学の昔の教えに「将来はこんな病気がおこる。その時にはこの医学が役立つ」というものがあります。ロシアでの経験で、そのとおりであると私は確信しました。そしてチベット医学が世界の人々の役にたつのだという自信をもつことができました。



チベット医学では、病気の状態をルン、ペルキェン、ティーパの三つに分けます。そして、血が血管の中をうまく流れないことによって病気になると考えているのです。チベット医学には二千年もの歴史があり、その中で多くの病気を看て、多くの患者を治したいという経験が蓄積されています。だからチベット医学が世界のあらゆる人々の役にたちうるのだと思います。

チベット医学はアラブから見ればアラブの医学のようであり、インドから見ればインドのもののようであり、中国から見てもまたしかりです。しかし、156節からなる『ギュシ』を見るならば、それがチベット独特の医学であることがわかるでしょう。

『ギュシ』の教えはとても広いものです。タンカは医学を研究する学生の理解をわかりやすくするために、医学の教えを図説してつくられたものです。しかし、チベット医学の根本について、あるいは病気の原因やその治療については、『ヴァイデューリヤ・ゴンポ』に詳しく記されています。それによるならばチベット医学の大半を知ることができるでしょう。それらによらず勝手な説をたてるならば、根拠を失い、チベット医学をだめにしてしまうのではないかと恐れています。

［チョウダク博士の講演の一部分を紹介しました。
通訳／翻訳は白館戒雲助教授にお願いしました。］

真宗総合研究所彙報　1993.4-9

■人事
武田武麿教授が所長の任期を終えたのにともない、
5月1日付で藤田昭彦教授が新たに所長に就任した。

■研究所委員会
4月19日(月) 17時50分　博綜館第3会議室
議題　今年度の研究計画について
7月13日(火) 12時10分　博綜館第3会議室
議題　客員研究員の件について

■「指定研究」チーフ連絡会
4月2日(金) 11時　博綜館第3会議室
議題　新年度の研究組織について

■「指定研究」会議/研究会
大学史編纂研究
4月20日(火) 12時　博綜館第1小会議室
議題　研究室の移転等について
5月28日(金) 17時　大学史編纂研究室
議題　今後の研究計画について
6月29日(火) 16時30分　大学史編纂研究室
研究会
報告者　助教授　三明智彰（研究員）
専任講師　宮崎健司（研究員）

国際仏教研究
4月21日(水) 12時10分　博綜館第1小会議室
議題　今年度の課題
ジャーナルについて
4月23日(金) 18時　真宗総合研究所
研究懇談会　――ムボンド氏を囲んで――
5月10日(月) 16時10分　博綜館第4会議室
テーマ　The Reflection on Contemporary Shinishu
講師　バックネル大学元教授
シェラルド・E・クック博士
5月12日(水) 12時10分　博綜館第1小会議室
議題　今年度の課題について
6月2日(水) 12時10分　博綜館第1小会議室
議題　今年度研究課題について
6月4日(金) 16時30分　博綜館第4会議室
テーマ　「北アメリカの宗教学に関して」
講師　カルガリー大学教授
レスリー・河村博士
6月16日(水) 12時10分　博綜館第3会議室
議題　今年度の課題
ジャーナルについて
6月29日(金) 17時30分　博綜館第4会議室
研究懇談会　―ジョン・ロス・カーター博士を囲んで―
7月7日(水) 12時10分　博綜館第1小会議室
議題　研究成果のまとめについて

真宗史料研究
4月27日(火) AV棟研究所分室
全体会議
議題　1．93年度研究計画について
2．計画推進と役割分担について

大蔵経学術用語研究
4月22日(木) 17時50分　博綜館第1研究室分室1
議題　今年度の研究の推進について
5月17日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会
5月31日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会
6月14日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会
6月28日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会
7月12日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会
7月19日(月) 18時　大蔵経学術用語研究室
研究会

■1993年度前期「開放セミナー」開催
†水曜講座
「王舎城の人びとの救い―観無量寿経に聞く―」
講師　神戸和麿　教授
期間　5月12日、26日、6月9日、23日、7月7日
午後6時半から8時半　会場　多目的ホール
†土曜講座
「清沢満之の教育論―教育本質論的考察」
講師　大竹　鑑　教授
期間　5月22日、6月5日、19日、7月3日、17日
午後2時から4時　会場　多目的ホール

■大谷大学開放セミナー特別公開講座
†「アメリカ人からみた江戸時代の禅画と墨蹟」
講師　リッチモンド大学
スティーヴン・アッディス教授
期日　1992年11月21日(土)14時30分
会場　1312教室
†「チベットの医学と仏教」
講師　ダライ・ラマ法王侍医
テンズィン・チョウダク博士
解説　山本哲士医学博士
期日　1993年4月13日(火)17時30分
会場　講堂

■学会参加
34th International Congress of Asian and North African Studies
8月22日から28日まで、香港において、第34回国際アジア・北アフリカ研究会議（ICANAS）が開催され、国際仏教研究班の宮下晴輝、桂華淳祥、加来雄之研究員が参加した。
1993 Parliament of the World's Religions
8月28日から9月5日まで、アメリカのシカゴにおいて、世界宗教会議の百周年記念会議が開催され、国際仏教研究班の多田稔、安富信哉研究員、樋口章信嘱託研究員が参加した。

研　究　所　報　第 30 号

1993年 9 月30日　発行

編集発行　大谷大学真宗総合研究所

〒 602　京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-212-5500　Fax. 075-212-5501